

CAP2018 運営舞台裏

鷹野重之（九州産業大学）

1. はじめに

去る 3 月 24 日から 28 日の日程で、福岡市科学館を会場に Communicating Astronomy with the Public 2018 (CAP2018) が開催されました。世界 53 か国から約 450 人の参加者を集めた CAP 史上最大の大会となり、招待講演・全体講演・分科会・ワークショップと盛りだくさんの内容で、天文コミュニケーションについて多くの議論がなされました。また、多彩な付帯イベントを通し、会議の目的の一つである天文コミュニケーター同士のネットワークングという観点からも、大いに成果があったものと思われます。

会議の内容に関しては天文教育誌上で矢治さんによる速報[1]が紹介されているほか、本特集の他の記事で詳しく紹介されておりますので、本稿でこれ以上触れる必要はないでしょう。ここでは、会議の内容から離れ、運営面での報告に終始したいと思います。天文教育に関して、このような大規模な国際会議を開催することは本邦初であり、今回の CAP 開催からは多くの経験を得ることができたかと思えます。ここでは、参加しただけでは知り得ない会議の裏側、苦労話や失敗談も含めた経験・知見などを共有していきたいと思えます。広く読んでいただく記事ではございますが、ときには筆者の感想も交えつつ、記憶に基づいて記したいと思います。

本会議開催にあたり、私は運営の副責任者、LOC の運営部門チーフという立場で参加いたしました。主な居場所はバックヤードとインフォメーションデスクであり、会議のアカデミックな部分についてはほとんど触れておりません。従いまして、本稿は、国際会議をホストするのに協力いただいた方々への 4 ペ

ージにわたる謝辞と、若干の反省文だと思ってお読みいただければと思います。

2. 招致活動

CAP は国際天文学連合 (IAU) のコミッション C2 (天文学の普及に関する分科会) [2] が主催する、おおむね 2 年おきに開催される国際会議ですが、実は開催場所は開催 1 年半前にならないと決まりません。これは同規模の国際会議としては異例ではないでしょうか。ここでは、福岡での CAP 開催が決定するまでの経緯を簡単に振り返りたいと思います。

ある年の CAP が終了すると、次回会場を選定するための招致合戦が始まります。まずは IAU コミッション C2 に対し、招致する意思があることを伝えるレターを送付します。このレターの内容により、数か国が候補地として絞り込まれ、残った候補は本格的な企画書を準備することとなります。今回の場合、2016 年の 8 月 20 日が第一次締め切りでしたので、これに間に合うように開催概要を作成しました。日本としてはアジアの玄関口である福岡を開催地として立候補することがすでに(事務局長の縣さんの中で)決まっており、会場として 2017 年 10 月に新規オープン予定だった福岡市科学館[3]を使うことなどが検討されていきました。また、ソフト面でも科学館や福岡市の協力を取り付け、簡単な提案書を提出することができました。

何か国から招致レターが提出されたのかは非公開ですが、その後、5 か国が一次審査を通過し、本格的な招致合戦に挑むこととなりました。日本もこの中に残ることとなり、10 月 20 日締め切りの本提案書作成に取り組むこととなりました。提案書では、福岡市なら

びに福岡コンベンションビューローの全面的なご協力のもと、福岡の魅力を余すところなく伝えられるよう、修正に修正を重ね、クオリティの高い招致ビデオなども作成しました。日本旅行さんにもご協力いただき、バンケットやエクスカッションなどの企画も魅力的なものを提案しました。

実は、筆者を始め、後に LOC となるメンバーの少なからぬ数は、実際に招致が成功するかどうか半信半疑だったのですが、11 月に福岡が採択されたとの一報が届きました。そこから、準備は大忙しとなります。

予算は参加者からの参加費、市からの補助、天文台予算や天文振興財団などからの補助を財源としていましたが、会議を魅力的なものにしようとすればするほど、費用は膨らんでいきます。天文学・科学教育に関係のありそうな企業に片っ端から寄付のお願いをするとともに、急遽クラウドファンディングを立ち上げ、一般からの寄付を募ることにしました[3]。また、口座を開くために組織委員会を立ち上げたり、統一ア트워크を策定したりと、急ピッチで準備を進めることとなりました。なお、ア트워크作成においては、国立天文台天文情報センタースタッフを中心とした PR チームが尋常ならざる働きをされたことを付記しておきます。

3. チーム福岡

CAP2018 運営では天文学／天文教育関係者および国立天文台スタッフが中心となっていきましたが、国立天文台と会場である福岡の間には物理的距離があり、現地での事前準備はどうしても現地で対応せざるを得ない点が多々あります。今回の会議では、福岡での運営を担う「チーム福岡」を結成し、運営準備にあたりました。ここではチーム福岡についてご紹介したいと思います。

今回は人数が 400 を超える（天文教育関連

としては）大規模な国際会議ということで、運営全体のお手伝いをイベント運営のプロである西日本新聞イベントサービス（NES）さんにお手伝いいただきました。NES さんは各種学会開催の補助業務やイベント運営の経験が豊富で、会議の運営にお力を借りることとなりました。NES さんには運営全般のコーディネートを委託しましたが、運営マニュアル作成や会場設営、物品のレンタル等まで幅広くサポートしていただきました。特に NES さんを介すことで案内・警備員の配置やケータリング手配などの細々とした点で我々（LOC）と各業者さんが直接やり取りする必要がなくなり、効率的にことを運ぶことができたかと思います。また、ウェルカムイベントを開催したボートハウスや能楽堂など、福岡市内の多くの文化施設が系列である西日本新聞グループにより運営されており、ソーシャルイベントの開催ではそのネットワークに大変お世話になりました。

Web 上での参加登録システムとしては、日本旅行さんの提供しているアポロンシステムを利用させていただきました。アポロンは 2017 年の天教総会の参加登録にも利用されており、システム利用により参加者さばきの労力が大幅に低減されました。また、ソーシャルイベント時のバスの手配や懇親会、エクスカッションの実施業務も日本旅行さんをお願いしました。参加者の VISA 手配に関しても、国立天文台国際連携室スタッフと協力して手続きを進めていただきました。

また、会場となる福岡市科学館を運営する福岡市の方々にも LOC に入っていただき、色々ご協力を仰ぎました。近隣商店を取りまとめたのランチマップ作製や、公共交通機関での案内表示など、自治体の協力があることで上手くいった点も多くありました。広報や地元企業との折衝、また財政支援の面では福岡市コンベンションビューローにもお世話

になりました。

もちろん、会場となる福岡市科学館の皆さん、プラネタリウム運営に携わるコニカミノルタさんには、開館準備～開館後の大変お忙しい中、大いにご尽力いただきました。科学館の素晴らしいホスピタリティに関しましては、本特集の中で、科学館の三村さんにご寄稿いただく中でご紹介いただいておりますので、そちらもあわせてご覧ください。

4. 会期中の運営

CAP2018は3月24日から開催されましたが、会場の準備はその前日の23日から本格的に行いました。案外面倒なのは、カンファレンスバッグの作成です。すでにPRチームの作成してくれた素晴らしいプログラムブックは会場に届いており、これに食事マップやチラシ、お土産などを加えた20点ほどの物品を加えてバッグに詰め、カンファレンスバッグ一式としていきます。参加者用に加え、スポンサーへの寄贈分なども併せて550セットほど作成するのですが、これはもう人海戦術でやるしかありません。前日の午前中に、LOC総出でようやく全セット袋詰めできました。さらにポスター会場の設営や、分科会上的使用機材チェック、受付やクロークの設営などで、あっという間に時間が過ぎていきます。

今回の会議運営において、最も懸念されたのは初日の受付です。海外からの参加者250人を含む450人を、会場オープンから開会までの1時間半でさばききれのか。しかも会場となる科学館では特別展「恐竜展」を開催中で、一般客も多いことが予想され、大混乱となることが心配されました。そこで、我々は、開催前日も受付を開き、前日受付した人には科学館／プラネタリウムのチケットをプレゼントするというにし、できるだけ前日中にレジストレーションを済ませてもらう

という戦略にでました。これが大当たりし、前日中に200人以上の方のレジストレーションを済ませることができました。おかげで当日朝はスムーズに開会を迎えることができ、裏方としてはほっと胸をなでおろしたところです。

会議が始まると、パラレルで様々な仕事が発生します。受付には常に人がやってきますし、セッション中には会場回りの雑務が生じます。クロークの荷物番やポスター会場の管理、ワークショップの補助、会場のレイアウト変更など、分単位で進める仕事が目白押しです。これらの仕事の一部はNESさんおよび業者さんに委託しましたが、LOCとしては近隣大学の学生さんをアルバイトとして雇用して、多くの雑務にあたってもらいました。今回の会議では13名の学生さんにお手伝いいただきましたが、慣れない仕事であるにも関わらず、彼らには大変大きな役割を果たしてもらいました。やはり大きなイベント開催では、おばさん・おじさんだけでなく、バイタリティ溢れる若い力が必要不可欠であると痛感しました。もちろん、受付業務などでは経験豊かな天文台スタッフの方々に頼り切りだったことは間違いないことも明記しておきます。

一方で、いざ会議が始まってみると、事前には想定していなかったトラブルも発生します。もっとも大きな誤算は、メイン会場である科学館サイエンスホールのプロジェクタがMacを受け付けない仕様であったことでしょうか。コネクタが合わないというレベルではなく、システム的にMacからの信号は検知しないという仕様にはさすがに驚きました。一般公演ではLOCの用意したWindows PCにファイルを移して講演するという手筈だったため、大きな問題は起こりませんでした。講演者ご自身でPCを用意されていた招待講演者の方にはご迷惑をお掛けすることになっ

てしまいました。プロジェクタと PC の相性はトラブルになりやすいポイントですので、事前にあらゆる事態を想定しておくべきだったと猛省しています。

今回、各セッションの座長は SOC が指名していましたが、基本的に外国からの参加者が座長を務めるセッションが大半でした。そこで、会場の機材利用や科学館スタッフ、学生バイトとのコミュニケーションを円滑に図るべく、セッションごとに座長補佐役の LOC を配置しました。結果的に、座長補佐には座長とのコミュニケーション補助だけでなく、発表用 PC の設置やデータの回収、プロジェクタやマイクの調整など、実に多くの役割を担っていただきました。実は、この座長補佐が今回の CAP では非常に重要で、實際上アカデミックな部分の進行は座長補佐中心に回っていたといっても過言でないかと思います。事前にこの役割の重要性を LOC で十分に認識・共有しきれておらず、事前に入念にシミュレーションしておけば避けられたトラブルも少数ではありますが発生してしまった点は反省しきりです。

あとは余談ですが、私はインフォメーションデスクで様々な相談や苦情対応にあたっていました。驚いたのは、iPhone の LOST/FOUND の多さです。毎日何件かのスマートフォン（なぜか全て iPhone）を失くした／拾ったとの報告が入ります。400 人の会議でこの調子ですので、いったい世界中で毎日何台の iPhone が行方不明となっているのでしょうか。

5. おわりに

CAP2018 は天文学・天文教育者のみならず、多くのバックグラウンドを持つチームで運営してまいりました。終わってみれば反省点もありますが、非常にうまく運営ができたのではないかと考えております。本会議は国立天文

台を主体とする東京サイドと、現地福岡側のメンバーが緊密に連絡を取りつつ準備を進め、運営にあたっていました。LOC の誰かひとりでもかけていたら、ここまで成功裏に会議を運営することはできなかったと思います。それぞれ本務のある中で LOC の役割を担っていただいたすべての方、また、会議にご参加いただき、盛り上げていただいた参加者の皆様に感謝いたします。

最後に個人的な感想ですが、私は裏方で雑用に追われていたため、結局セッションには一切参加できず、講演も一件も聴くことができませんでした。世界中の天文教育普及のエキスパートが知見を披露してくださるという絶好の機会でありながら、一切その恩恵にあずかることができなかったのは非常に残念です。もっとも、これは自身の準備不足が原因ですので、次回以降どこかで LOC を引き受ける機会があれば教訓として生かしたいと思います。また、次回以降の CAP では純粋に一参加者として、天文教育普及の最前線の方々とコミュニケーションをとることができればと思います。

文 献

- [1] 矢治健太郎 (2018)「世界が福岡にやってきました！～速報!世界天文コミュニケーション会議 2018～」天文教育
- [2] IAU Commission C2 Web (2018 年 6 月確認) :
<https://www.communicatingastronomy.org/>
- [3] 福岡市科学館 Web ((2018 年 6 月確認) :
<https://www.fukuokacity-kagakukan.jp/>

鷹野 重之